

「千葉氏を

語る」だより

会報誌第17号
千葉氏を語る会
事務局
発行日
令和6年
3月15日

令和6年2月10日 蘇我コミュニティセンター・ハーモニーホールにおいて「なぜ由比の八幡宮が北山に遷座されたか」と題し、講演とクロストークが開催されました。

ここで講演されました丸井敬司先生の講演要旨を掲載いたします。

講演要旨

なぜ「鶴岡八幡宮」は北山に遷座されたか？

「改竄された歴史書『吾妻鏡』を復元する」

皆さん、本日は、お忙しい所、お集まりいただきありがとうございます。本日の講演会のテーマは治承4(1180)年の源頼朝の挙兵に係るもので、鎌倉幕府の象徴の一つであった鶴岡八幡宮が、頼朝が鎌倉に入ると同時にその北方に位置する北山に遷座された事で

す。これについては、研究実績もほとんどなく、また、一般の人たちの関心も高くないようですが、西洋諸国やアメリカの日本学の研究者達からは関心の高い事柄で、私自身にも多くの問い合わせが来ています。その意味では「このテーマは中世最大の謎」と言い換える事も出来ませんが、それに答える意味で、今回の講演のテーマとしました。

さて、頼朝の挙兵の問題は資料が極めて少なく、この研究は『吾妻鏡』に頼らざるを得ない状況ですが、この書の「以仁王の令旨発給事件」から「頼朝の鎌倉に入るまで」の記述は、矛盾が多く、多くの学説が出ています。これを生み出した原因はこの期間の『吾妻鏡』の記述に多くの問題点がある事によるものです。

その意味から本日の話は頼朝の挙兵を①以仁王の令旨発給、②頼朝の挙兵、③石橋山の戦い、④房総渡海

⑤渡海後の頼朝の動向の五つのテーマの順で、最後に「鶴岡八幡宮の遷座」について話を進めていきたいと思います。さて、今回の話では、先に述べた『吾妻鏡』の問題が生じた原因は『吾妻鏡』が鎌倉幕府末期に写された際に一部の文が改竄された事によって生じたものですが、それを復元する事で矛盾を改める事が可能となったので、その成果を発表するものです。

さて、①の以仁王の令旨発給事件の問題点は治承4年4月9日の夜、源頼政が以仁王を訪ね、平家打倒の相談をし、頼朝や全国の源氏に令旨を発給までが一晩で行われており、特に、頼朝に届けるために偶然、京都にいた源行家を八条院藏人に任命しており、これには八条院障子に相談しなければならぬ事から、この事件には以仁王の義母の八条院障子が関わっていた事が分かります。また、この他に以仁王が平家に討たれた時、東大寺や興福寺の僧兵が以仁王の救援に出勤していますが、これらの僧侶を説得した人物の存在だけではなく、後に同6月に頼朝の挙兵を勧めた三善康信もこれに加わっていた可能性も出てきました。

康信の件は、頼朝が令旨を受取っていた事を平家が知る前に頼朝に挙兵を

呼びかけた事から導き出された結論です。その意味ではこの密談には僧侶の日胤、八条院障子、三善康信の三人が参加していた事が『吾妻鏡』から除かれており、これらの人々を本文に復元すると矛盾の無い正しい文章になります。

続いて②の頼朝の挙兵の問題ですが、『吾妻鏡』には頼朝が挙兵を決め、関東の武士達に挙兵を呼びかけた二日後の6月27日、頼朝は千葉胤頼と三浦義澄の二人を呼び、密談をしています。この内容も『吾妻鏡』には書かれていませんが、これらは次項以降、説明します。

③石橋山の戦いでは、頼朝は8月17日、挙兵し、伊豆目代山木氏を破った後、同23日、石橋山で大庭景親と戦い、これに大敗していますが、この時、三浦軍は三浦半島の衣笠城から出陣していますが、三浦軍が石橋山に到着する前に頼朝の本隊が戦いに負けたため翌同24日に三浦半島に引き上げていますが、その途中、景親に動員された畠山重忠と交戦し、これを難なく打ち破っています。

この戦いに三浦軍が一方的に勝った理由には三浦軍には千葉軍と上総軍が加わっていたからですが、『吾妻鏡』には、

これが除かれている事で、多くの学説が生まれています。しかし、この部分に「三浦軍には千葉軍と上総軍が加わっていた事」を復元するとこの事項の文章は矛盾の無いものとなります。なお、三浦軍に上総軍が参加している事から先の密談には広常の子常頭も参加している事を考えなくてはなりません。これも後に除かれたものと思われ

ます。続いて④頼朝の房総渡海に移ります。ここでも問題点は『吾妻鏡』では頼朝が真鶴岬を出帆する前日の27日、北条時政が、安房の竜島に渡り29日に頼朝を出迎えた事になっていますが、これは相模湾の海流が竜島方向から真鶴岬方向に流れており、距離も70キロ以上もあることから時政の竜島到着は後世に作られて『吾妻鏡』に挿入されたもので典型的な改竄の結果と思われると思います。なお、この時の頼朝が乗った船は千葉氏と関わりの深い伊豆山権現の熱海船が使われた事や洲崎で頼朝を出迎えたのが三浦義澄であった事から考えると石橋山の戦いから房総渡海までは以前に計画されたものであり、この計画は6月27日の頼朝と胤頼・義澄・上総常頭の四者の密談の際に計画さ

れたものと思われま。これも『吾妻鏡』の原本に書かれていたものが改竄されています。

続く⑤の渡海後の頼朝の動向の問題点は、9月13日の千葉胤頼・成胤による「当国目代」の攻撃ですが、これについては多くの研究者は「下総目代」としてはありますが、下総国府までの距離は約30キロ以上あり、完全武装の武士がほぼ1日の行軍距離であるだけではなく、この二人の兵力で国司の代官である目代を討つことは不可能です。一方、これを原文では上総目代とされていたとするとこの二人は上総氏一族の救援を得る事は可能であり、兵力としても上総目代を遥かに超えた強力な兵力となる事から目代を討つことは可能となります。また、同14日の千田合戦では上総国府の攻撃に参加した成胤が単独で千田親正の軍と戦っていますが、この時の常胤を始めとした千葉軍の動向が書かれていません。しかし、この千葉軍本隊の動向については、奥州合戦の際の記事に登場します。これには常胤が一族を率いて上総国府の頼朝に参向した事が書かれています。が、このため成胤は単独で親正の軍と戦わざるを得なかった事になります。これも常胤の頼朝への参向の記事を

『吾妻鏡』に復元すれば、成胤が単独で親正の軍と戦わざるを得なかった事が明らかとなります。

さて、ここで、本題の鶴岡八幡宮の遷座の話に移ります。頼朝は、10月の上旬には鎌倉に入りましたが、その直後の10月12日には現在の元八幡宮の位置にあった鶴岡八幡宮を鎌倉の北方の北山に遷座しています。

これが本日の最大のテーマですが、『吾妻鏡』には鶴岡八幡宮の遷座の理由が書かれていません。しかし、その理由は先に述べた奥州合戦の時の記事の中に述べられています。

この時、常胤は頼朝の依頼で「白旗」を制作していますが、その「白旗」は常胤が制作した後、鶴岡八幡宮の別当坊で、祈祷され、奥州合戦に使われました。

驚く事にはこの「白旗」には「八幡大菩薩」の他に「伊勢大明神」の神名が刺繍されていたのです。

つまり、これは鶴岡八幡宮には「八幡神」の他に「伊勢神」が合祀されていた事になりますが、この「伊勢神」、即ち「天照大神」の本地仏が「妙見菩薩」であったのです。

鶴岡八幡宮の別当坊に妙見菩薩が祀られていた事については『吾妻鏡』には

承久の乱(1221)から文永三年(1266)の45年間に朝廷が行っていた妙見菩薩を本尊として国家安寧を祈る「尊星王法」が鶴岡八幡宮の別当坊で10回、行なわれていた記録があります。これは幕府滅亡までには20回以上行われていた事を意味しますが、更に2回目の蒙古襲来時や鎌倉幕府滅亡時にも鶴岡八幡宮の別当坊で尊星王法が行われました。これは鶴岡八幡宮の別当坊には妙見菩薩が祀られていた事を示しています。

八幡宮の別当坊に妙見菩薩が祀られていた事は、現代の我々には奇異に聞こえるかもしれませんが、先に述べたように鶴岡八幡宮の別当坊では尊星王法が頻繁に行われていた事や鶴岡八幡宮と同じ源氏の祖先である義家が建立した八幡宮で、千葉一族の相馬氏とも関係の深い竜ヶ崎市川原代町の八幡宮の別当坊の寺名は「妙見寺」でした。

こうした事を考えると鶴岡八幡宮の別当坊に妙見菩薩が祀られていた事は特別な事ではなく、頼朝は挙兵直後に自分を支持する千葉氏や上総氏、畠山氏など東関東の妙見菩薩を守護神とする有力武士団の結束を図るため鶴岡にあった八幡宮に妙見菩薩

を合祀する必要がありました。そのために「鶴岡にあった八幡宮の社殿を北山に遷す事になった」というのが本日の結論です。

ご清聴ありがとうございました

(拍手)



千葉胤盛と下総武石氏・

奥州武石氏

(会員) 秋野林洋

千葉常胤の子供ら・千葉六党のひとり、千葉胤盛が、下総国千葉郡武石郷を領したことより、武石氏を名乗る。その末裔が、そのまま、武石郷に住み続けた下総武石氏、父、千葉常胤が源頼朝から受けた陸奥国の所領の内、宇多郡伊具郡、亘理郡の一部が譲られたが、武石氏の一部が亘理郡に移り亘理氏を名乗り後に伊達家と姻戚を重ねて、涌谷伊達家となった奥州武石氏について 記載する。

武石三郎左衛門尉胤盛

「千葉大系図」には以下の記載がある。

胤盛 武石三郎 左衛門尉

母同胤政。伝領下総国千葉郡

武石郷也。父兄弟相俱随于

頼朝卿、所々進発、軍功績不違

算。或昵昵近供奉於公界

規式、父子兄弟超干諸人平均

之。賜本地及父加恩地奥州

宇多、伊具、亘理三郡、而子孫

繁盛干東奥矣。建保三年乙亥六月十三日卒。年七十。又、「千葉伝承記」には

胤盛武石三郎承安元年辛卯十一月十五日下総武石城に移る。

武石三郎胤盛は、千葉常胤の三男として、久安二年(一一四六)に生まれた。母は他の兄弟と同じく秩父重弘の息女。

素加天王社(現花見川区幕張町の子守神社)の伝承によれば、胤盛は、気が短く父常胤と折り合いが悪く、当初、遠い神生城(香取市神生一八八)に居を構えた。弟の大須賀胤信が気の毒に思い、所領を分けてやり、承安元年(一一七一)に千葉郡武石郷(花見川区武石町)に移る。

武石三郎胤盛と称された。胤盛に関する史料は少ない。「吾妻鏡」に若干の記載がある。

治承四年(一一八〇)源頼朝、伊豆にて挙兵。石橋山の戦いで平家方の大庭景親の軍に敗れた源頼朝は、海路安房に逃れ再起を図る。加勢を頼まれた千葉常胤は即決し源頼朝の旗下となる。

そして、九月十七日、三郎胤盛は、下総国府にて千葉常胤、千葉介兄弟と共に頼朝を迎えた。

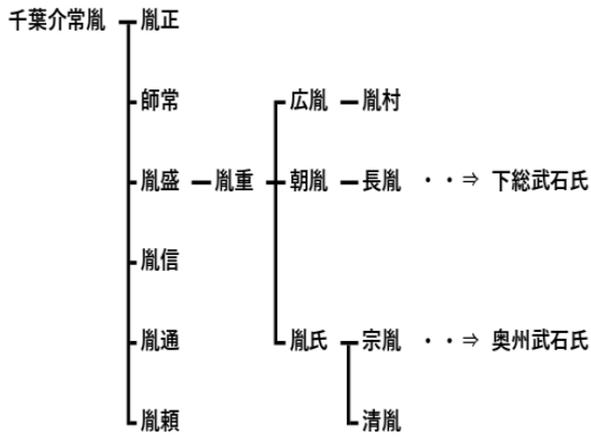
寿永元年(一一八二)八月十八日、頼朝の嫡男・万壽(後の頼家)の「七夜の儀」を任されたのは、千葉介常胤。常胤妻の陪膳の儀に続き進物の儀。千葉胤正と相馬師常は甲を担い、武石胤盛と次弟大須賀胤信と鞍を置いた馬を引き、東胤頼は剣を捧げた。常胤、千葉六党の揃いぶみである。

胤盛は千葉一族と共に木曾義仲軍、伊勢平家軍と戦った。寿永三年(一一八四)「粟津原合戦」にて、胤盛は千葉一族と共に木曾義仲軍、伊勢平家軍と戦った。文治五年(一一八九)八月十二日、奥州藤原氏との戦いに、東海道大将軍千葉介が率いる軍勢に三郎胤盛は兄弟と共に、従軍、軍功をあげ、常胤は頼朝より各所に所領を賜った。

内「伊具、亘理、宇多郡」の地頭職を、三郎胤盛へ分与した。建久二年(一一九二)正月一日、千葉介常胤が献じた碗飯の儀において三郎胤盛は砂金を献じている。

碗飯の儀

鎌倉政権樹立以後、元服や移徙等の重要な儀式の際に行われ、とりわけ「歳首の碗飯」は武家政権の重要な儀式。御家人が將軍に太刀名馬、弓矢等と共に碗飯を奉じて主従関係を確認する儀式。胤盛は建保三年(一一二五)七十歳で没す。一説には六十一歳とも。



武石次郎左衛門尉胤重

武石氏二代目、実朝の側近として幕府に仕えたと言われるが、その活躍は殆ど記載なし。「巨理氏系図」には武石二郎胤重のみの記載。又、「吾妻鏡」には、建長二年(一一五〇)三月一日の条に、武石入道胤重の名がみえるのみである。松島寺の「五大堂鐘銘写」には「…其後巨理郡地頭武石二郎胤重、嘉禄三年(一一二七)丁亥被

鑄改畢…」とあることから同年に巨理郡の地頭になったものと、考えられる。尚、千葉亥鼻城下の光明山知恩院胤重寺は武石胤重の後裔で僧となった雲巖上人が先祖胤重の霊を弔う為、永禄年間(一五五八)に創建。武石次郎胤重には、三人の子息がおります。

武石小次郎胤重

武石氏三代当主・官途・左衛門尉子に次郎胤村が伝わるが、彼の活躍も見られない。

武石三郎朝胤

武石氏四代当主 官途・左衛門尉実績的に胤重の後継者と思われる吾妻鏡・寛元三年(一一四五)八月十五日、放生会に初出。建長六年

(一一五六)六月二十九日の放生会の供奉人として「三郎左衛門尉朝胤」と記載されている。朝胤はその後息子新左衛門長胤と共に武石氏の総領として、幕府に出仕した。

武石四郎胤氏

奥州武石氏の祖、官途・左衛門尉、妻は千葉介胤綱の娘。吾妻鏡・建長二年(一一五〇)八月十八日。由比ガ浜逍遥供奉に際して、將軍家側に供奉した。建長四年(一一五二)八月一日、宗

尊親王の征夷大將軍宣下に対する鶴岡八幡宮に御拝賀の随兵に「武石四郎胤氏」が記載。正嘉二年(一一五八)十二月二十九日には「四郎左衛門尉胤氏」と見える。

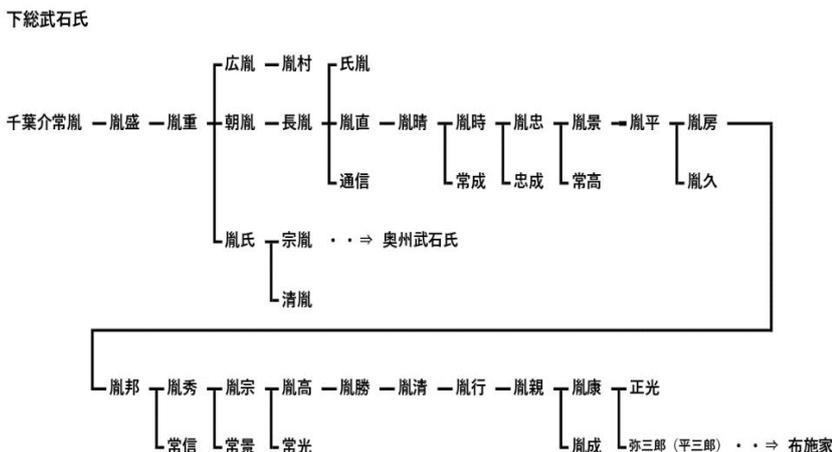
武石四郎長胤

武石氏五代当主 官途・左衛門尉、武石朝胤の子。弘安三年(一一八〇)新日吉の小日吉小五月会に於いて流鏝馬の三番手として「武石新左衛門平長胤」の名がみえる。武石家の総領として、活躍していた。館は花見川区長作町といわれ、その跡は現在の長胤寺といわれている。

武石弥四郎宗胤

奥州武石氏二代当主、官途・左衛門尉。肥後守。父は武石四郎左衛門尉胤氏、母は千葉介胤綱息女。乾元元年(一一三〇)下総武石郷から奥州巨理郷に下向。小堤城を居城とした。正和三年(一一三二)七月三日卒、六十四歳。

下総武石氏



母は亘理宗隆の娘。

天文十二年(一五四三)兄綱宗の討死により家督相続。

天正年間(一五七三)居城を小堤城より北東、亘理城を築き移つていった。

天正十九年(一五九一)、伊達家の岩出山移封に伴い、亘理氏も、遠田郡涌谷城に移った。

文禄三年(一五九四)死亡、享年六五歳

伊達定宗

天正二年(一五七四)生。父・亘理重宗母・相馬盛胤の娘。

涌谷伊達家初代当主(亘理氏十九代)慶長五年(一六〇〇)関ヶ原の戦いに際して、上杉領の白石城

攻略戦で活躍。

慶長九年(一六〇四)父・重宗の隠居に伴い家督相続。

慶長十一年(一六〇六)伊達政宗の庶子宗根が定宗の妹を娶り

重宗の隠居領・清水水城と併せて亘理氏の名跡を継いだ。

その代わりとして、正宗から「竹雀紋」と「縦三引両紋」を下賜され、伊達姓を名乗ることが許された。

これ以降、涌谷伊達家と称した。

以降、伊達家の重臣として活躍した。

伊達宗重

元和元年(一六一五)伊達定宗の次男として生まれる。

天童重頼の婿養子となる。

寛永十六年(一六三九)世子の兄の死去により、天童家より戻され、涌谷伊達家の世子となる。

慶安四年(一六五二)父・定宗の隠居に伴い、家督相続。

寛文十一年(一六七二)大老酒井雅楽頭郎にて原田甲斐宗輔に

よる突然の刃傷で非業の最期を遂げた。(行年五十七歳)

この事件が世にいう「伊達騒動(寛文事件)」である。宗重は仙台藩の安泰を図った忠臣と称された。歌

舞伎、浄瑠璃として度々上演され、山本周五郎の小説「縦ノ木は残

つた」となり、NHK大河ドラマにもなった。

伊達宗元

寛永十九年(一六四二)生。伊達宗重の次男、涌谷伊達家三代当主

(亘理氏二十一代)涌谷伊達家の「涌谷文書」に以下の記載がある。

「御幕紋之儀三付下総国三テ千葉

妙見之縁起凶井二公儀

工被仰上候品有リ」

元禄元年(一六八八)藩主伊達綱村から、日光東照宮の修理を命じられた。宗元は工事の際、掲げる

幕を新調するに当たり伊達氏の「竹雀」に加え、千葉氏の紋を加

えようとした。元禄二年正月、家臣を千葉氏家紋調査のため下総妙

見寺に派遣、それを基にして、「十曜紋」を決定し、「竹雀」と合わせ

て旗として、掲げた。

亘理胤元

安政四年(一八五七)生。伊達邦隆の、長子。涌谷伊達家の十三代当

主。亘理家三十一代)

慶応三年(一八六八)邦隆の急死により十二歳で家督相続。邑主となる。慶応四年の戊辰戦争には、叔

父亘理隆教が陣台と涌谷伊達家の兵を率いて出陣。仙台本藩は、戊

辰戦争の敗戦により、知行を四分の一に減封。胤元も代々治めた、

涌谷領も没収された。明治維新後、「伊達」から本姓の「亘理」に改

める。明治十五年(一八八二)死去、享年二十六。

嗣子は亘理胤正、後に衆議院議員となる。

武石豪探索

さて、武石三郎胤盛が居城した千葉郡武石郷を探索してみよう。

私が畑を借りて、野菜を作っている所です。

花見川区武石町一丁目、京葉道路武石インター付近です。

「武石城址」は、三会山真藏院の裏山とされている。お堂の裏手(西

側)は崖となっており、そこが主郭のようだ。

「真藏院」花見川区武石町1丁目(旧字名権現腰)真言宗豊山派

真藏院は、案内板によると、大同元年(八〇六)開祖。

建久八年(一一九七)胤盛が母の菩提を弔うため、柳地藏菩薩を本尊として堂宇を建立。胤盛は短慮の

為、父常胤から疎まれていたので、母を亡くした悲しみが他の兄弟

以上に深かったと思われる。又、母の死因は常胤・胤盛の父子関係による、入水ともいわれ

ています。本堂前には、秩父産の緑泥片岩を「板碑」がある。

高さ三メートル程で、千葉県内でも三番目に大きいとのこと。

この板碑は、永仁二年(一一五三)胤盛の子孫・武石左衛門尉胤晴が

須加原の愛宕山に建立した七枚の板碑の一枚である。愛宕山は武石町二丁目にあり、現在「愛宕神社」の祠がある。一帯は海抜六メートルの砂州状で古墳時代後期の方墳。石室があり、金環、直刀、鉄鏃などが出土したとか。

板碑表面上部に宝珠と種子阿弥陀三尊を大きく薬研彫りにし、その下に「右為先妣精霊出離生死証大菩薩也永仁第二曆季秋卅之天」と陰刻してある。千葉氏に關係ある某女の冥福を祈る為に秋の彼岸の中日に建立した供養碑である。某女とは胤盛の母で入水して須加原に流れ着いた所に建立したとの言い伝えがある。

宝暦三年(一七五三)須加原開墾の時に真藏院に移された。本堂の左に「浪切不動堂」があります。胤盛の曾孫武石新左衛門長胤が正治元年(一一五九)に、胤盛の守り本尊がある不動尊を祀って建立した。

不動堂の脇道を登ると、古びた墓地があり、小さな祠がある。「羽衣神社」このあたりが、武石城の搦手口と思われる。

羽衣神社西南西南三百メートルの「三代王神社」を訪ねる。

幕張駅北方一キロ、一段と高い所に大きな古木に覆われ、こんもりとした、森ののなかにある。三代王神社の命名の由来は、天児屋根命(祖父)、天押雲命(父)、天種子命(祭神)と、続く三世代の命を祀るが故に命名された由。

社伝によると武石胤盛が武石城に居住してから、三十一年後の建仁二年(一一二〇)に郷中安全の守護神として、明神社を創建したのが、始まりとされている。下総三山の七年祭では産婆役となる。三代王神社の西、二百メートル。今は高層マンションが建つ。

そこが「馬加城址」築城は大須賀庄本郷に所領を与えられた千葉常胤の四男大須賀胤信によって、治承四年(一一八〇)とされている。胤信は、後に埴生郡に移る。時代は下り、室町時代後期には、千葉満胤の長庶子の馬加康胤が拠所とした。享徳の乱に乗じて康胤は千葉胤直を滅ぼし、宗家の座を奪った。だが、馬加氏の支配は長くは続かなかつた。馬加城の廢城時期は不明だが千葉胤直が天文年間

不明だが千葉胤直が天文年間

(一五三二〜一五五五)に在城したとの記録より戦国時代後期まで存在したようである。

最後に「長胤寺」を訪ねる。真藏院の前の細いクネクネした道を北へ約一キロ。花見川区長作町。「日蓮宗長胤寺」の山門をくぐると、立派な本堂。その屋根には千葉氏の象徴「九曜と日月の紋」。正元元年(一二五九)自らの館を寺とする。

山門の右手の庫裏の前には城館だつた頃の土塁が見える。長胤が創建した頃は「真言宗」であつたが、天文一四年(一五〇六)日蓮宗に改宗。所謂、「上総七里法華」の影響と酒井氏の勢力がはるかこの地に及んだことがわかる。

以上、下総武石郷を探索したが、次の機会には、奥州武石氏の居住した、宮城県亘理町及び涌谷町を是非、訪問して、その足跡を探索したいもの、思っている。

トピックス

紫式部の生涯について

会員 高野利太郎

一、はじめに
今年のNHK大河ドラマは「光る君へ」であります。それは世界最古の恋愛小説として有名な『源氏物語』の著者としての紫式部を主人公として脚色されたものであります。

歴史、郷土史に興味のある会員にとつては関心のあることだと考えます。そこでこの紫式部の生涯について概略を取り上げてみたいと思ひ綴りました。

紫式部は平安時代中頃に生存して作家、歌人、朝廷内の女房として当時の貴族社会において活躍した者です。しかし、その生涯は不明な事柄が多く、解明は大変難しいようです。

二、実名と生没年

まず本人の実名や生年、没年は不明です。貴族社会では一般的に「紫式部」と呼ばれていたようすがこれは通称です。当時の貴族社会では女性の実名は公にしない場合が多く、紫式部や清少納言、和泉式部などはみな通称であり、実名は解つていません。明快な通称が

ない場合、例えば『更級日記』の作者は「菅原孝標女」（同娘）と表記されています。

生年、没年についても不明でありますが、その後の研究により生年については天禄元年（970）天元元年（978）の間に数説あり、また没年についても様々な学説があります。藤原実資の『小右記』には、長和二年（1014）五月二五日の条文には次のような記述があります。「実資の甥で養子の藤原実平が実資の代理で皇太后彰子のもとに訪問した時、越後守為時女という女房が取り次ぎ役を務めた」という文書が紫式部について残された記録のうち最後のものであるという説が有力であります。

三、婚姻について

彼女は二十才中ば過ぎ、親ほどの差のある藤原宣孝と結婚し、女子を産んだのです。（大式三位・本名藤原賢子）その後結婚生活は三年ほどで長保三年（1001）、夫が死亡します。しかし、一説ではそれより前に紀時文という貴族と結婚したという説があります。いずれにしても夫の死後藤原道長に召し出されまして一条天皇の中宮彰子

（道長の娘）に仕える間に道長の支援を受けて『源氏物語』を完成させたのです。

四、著作について

彼女の著作『源氏物語』がありますが、これは完成当時から貴族社会の女官たちには評判が良く、みんな我先にと求めたほどでした。和歌については『紫式部日記』に十八首の和歌が残されています。更には、後世の藤原定家によつて編纂され、現在でも多くの人々に愛好されている『小倉百人一首』にも選ばれその五七番首として「めぐり逢ひて 見しやそれとも わかぬまに雲がくれにし 夜半の月なか」と歌われています。そのほか他の歌人と共に選ばれた歌集には『紫式部集』、『拾遺和歌集』、『勅撰和歌集』等に計五十一首の和歌が残されています。このように歌人としても多くの名作を残しています。

五、墓所について

此れほど生涯を通じて、今日でも関心の強い人物の墓所として京都市北区紫野西御所田にある古蹟が紫式部の墓であります。この場所は淳和天皇の離宮があり、紫式部が晩年住んでいたといわれ、後世にな

つて、からも本人の歌碑や「源氏庭」が創られ当地の観光資源にもなっているのです。

六、親族について

紫式部は藤原北家良門流の家に生まれ、さきに述べました父は越後守・為時であり母は摂津守・藤原為信女でありましたが、紫式部が幼少の頃母を亡くしております。同母の兄弟に、藤原惟規がいたといわれていますが、どちらが兄か、姉か不明です。他に実の姉が存在したことも事実のようです。三条右大臣・藤原定方、堤中納言・藤原兼輔はともに父方の曾祖父で、しかも兼輔もまた百人一首の二七番歌に選ばれています。このように一族には文学、漢文等に秀でている人が多いのです。彼女も幼い頃より当時の女性に求められる以上の才能で漢文を読んだ才女としての逸話が多く伝わっています。五十四帖に及ぶ『源氏物語』、官仕え中の日記『紫式部日記』にその才気が端的に表現されています。一方娘の大式三位（賢子）は母とともに一条天皇の中宮彰子に仕えたのです。紫式部は宮中に於ける社交性よりも執筆に熱中していたのですが、娘は社

交性に富んで、その頃誕生した後冷泉天皇の乳母として拔擢されました。紫式部の人柄が、少しでも理解出来れば幸いです。以上



編集後記

編集子

お待たせしました、会報誌十七号をお届けします。今回号では、令和六年二月十日開催されました講演会から丸井副会長の講演「なぜ鶴岡八幡宮は北山に遷座されたか」の概説を掲載しました。また会員秋野林洋さんの投稿で千葉常胤三男武石胤盛衰についての記事を掲載しました。皆様のご協力ありがとうございました。